

山田みやこの活動報告

平成31年1月21日(月)

宇都宮大学主催の「環境化学物質のリスクに向き合う」に参加

東海大学 坂部貢医学部長の講演

ごくごく当たり前に、私たちの周りにある化学物質の柔軟剤・合成洗剤・抗菌剤・殺虫剤・化粧品・建築材など、その裏には様々なリスクが隠れている。その環境科学物質が、私たちの健康に影響を与える可能性が大きい。大学や行政、私たち一人ひとりなどの様な対策ができるのか医学的見地からの提言だった。

20年前、「ノニルフェノール」「ビスフェノール」の化学物質により環境化学物質のヒト胎児曝露のリスクが報告された。

自閉症・ADHD・LDと環境についても、鉛・水銀・ヒ素・PCB・トルエン等が発達途上にある子どもの脳への影響が大であるとされた。

またシックスクール症候群の中には、化学物質に曝露すると描く絵の質が攻撃的になり年齢相応の絵が描けなくなってしまうという。

一部の化学物質過敏症の発症者固有の問題ではなく全ての人々の問題として喫緊の課題であると問題提起された。国際的に合意された持続可能な開発目標(SDGs)のひとつ。「誰一人取り残さない」という理念として定着した「予防原則」を化学物質のリスク対応をしていくことが重要であるとの結果だった。

2007年本県の学校におけるシックハウス対策マニュアルが私の一般質問から作成されたが、現在の「香害」を始め、様々な問題が出てきている。

さらなる改訂が必要と痛感した。今後の重要な活動テーマの一つである。

公開シンポジウム

環境化学物質のリスクに向き合う

医学的見地からの提言を受けて

事前予約不要

2019年
1/21(月)
16:00-18:30

入場無料

柔軟剤、合成洗剤、タバコ、抗菌剤、殺虫剤、化粧品、建築材、家電製品・・・
ごくごく当たり前に、私たちの周りにあるもの。実はその裏には様々なリスクが隠れています。

環境化学物質が私たち自身の健康に影響を与える可能性について、医療現場の最前線からお話しいただけます。大学や公共機関、そして私たちは、どのような対策ができるのでしょうか？

基調講演：坂部 貢先生
(東海大学医学部長)

場所 宇都宮大学峰キャンパス
大学会館2階多目的ホール

主催：宇都宮大学

科学的な不確実性がある中で
対策や救済の進展をもたらした政治的要素(2)
弱者や感受性の高い被害者に耳を傾け
基準を合わせる

先行研究からの警告

- 被害が認識されたとき、被害者はその被害を全身で感じているが、それを他人に言葉で伝えるように客観化するのには、これも容易なことではなく、多くの場合十分には表現できない。だが公害の認識は全体的であり、総合的である。
- これに対して加害者である発生源の認識は、せいぜい汚染物質の濃度や被害者の数と行った数字で表現できる部分に限られた、部分的なものではない。(中略)もし公平な第三者と称するものが居て、双方の言い分を均等に聞こうとすればそれは部分と全体の中間を取る認識になり、必然的に加害者と同じ部分の次元になってしまう(宇井純「公害における知の効用」)

1/21 15